

漢法苞徳塾資料	No. 510
区分	治法・灸法
タイトル	灸治療概論 改-001
著者	八木素萌
作成日	1990.08      2001.03 校述

## 1. 灸治療の一般的意義

鍼灸治療とは「陰陽・榮衛」を調和させることであり、具体的には「補瀉」が極めて重要である。

「補」とは「陽気」を与え、体内に押し入れることである。「陽気」の不足する場合に、榮穴を鍼で補しても効果が期待できないときには、灸を用いることになる。灸治療は艾によって、身体に無理なく「火熱」という「陽中の陽」を加え入れるのである。故に鍼による補では足りない場合・鍼によって瀉が過ぎた場合に、灸が適当な訳である。

灸治療は〈熱を補充〉する治療である。「打膿灸」が津液の排出を目的とすることから「瀉」となるが、これ以外は「陽・熱」を補充するものとなる。この点、鍼治療とは趣が異なっている。『内経』や『甲乙経』に「陥下する部に灸する」との指示が見られるのは、虚の部位と見なしていることが判る。『傷寒論』に「火攻」を禁ずる記述が見られるが、「陽熱」「湿熱」の症候に禁じているのである。いずれも、灸は「陽・熱」を補充するものだからである。

「気虚」「気脱」の病症には重要な穴に施灸するとしばしば驚くべき効果を見ることができる。「痺症」は経筋的な症候である場合が大部分であって「燔鍼」が卓効するのであるが、「灸頭鍼」や「施灸」も一効果は「燔鍼」よりも弱いが一「燔鍼」に代わるものとして有効である。

『千金方』には千壯とか年壯をすえている場合が見られる。よく知られている「逆子」の治療には『鍼灸聚英』に「至陰」穴が記載されているが、これは施灸である。右の「至陰」一穴で十分のようである。また「石野信安師の安産の灸」は「三陰交」一穴の施灸である。「中風七穴」も施灸が基本になっており、「食中毒の下痢」に裏内庭の灸や、「脚気八処の灸」も著名である。「モノモライ」には「二間」の灸は強力な効果を見せる。肺の邪実の為に痰が粘ってなかなか切れないときの「魚際」の施灸も効果が高いものである。灸治の穴で「合谷」「二間」などは、鍼治の場合と部位がやや異なるのは良く知られている。灸治の最も古い著作としては『黄帝明堂灸経』がある。

一般に「灸治」は慢性の難病に良いとされる。しかし病が痼疾化すると穴の圧痛反応はボヤケて判定し難くなる傾向があり、背腧穴の反応も病が古ければ古いほど奥に潜み、また脊中寄りになるという傾向がある。よってこのような反応を触知でき・探し出せる〈手〉を作ることが大切になる。

## 2. 灸の不適について

この問題について、病症の解析に基づき病理的な意味合いで論じているのは、『傷寒論』である。例えば、夏の暑い日や汗ばんでいるときに、灸は熱いと言われる。「陽・熱」が盛んな季節で、皮毛腠理にも夏の盛んな陽気が「ホテリ」としての現象を現わしている所に、「火熱」を加えることになる為で、それは『傷寒論』の「火ニテ攻ムルベカラズ」と指示している場合に相当している。

清代の尤怡は『傷寒貫珠集』と言う『傷寒論』の研究・解説の書中に「火逆十条」を記述している。これを研究することを通じて、灸の禁忌を考えてみたい。

①「脈浮。宜以汗解。用火灸之。邪無從出。因火而盛。病從腰以下必重而痺。名火逆也。」

②「微数之脈。慎不可灸。因火為邪。則為煩逆。迫虛逐實。血散脈中。火氣雖微。内攻有力。焦骨傷筋。血難復也。」

注……迫虚逐実：

逐は、おいこむ・おいつめる事、故に此処は、虚を追放し実を把える事を言う。  
逆治を行っている。

③「脈浮。熱甚。反灸之。此為実。実以虚治。因火而動。必咽燥唾血。」

④「太陽病。以火熏之。不得汗。其人必躁。到經不解。必圜血。名為火邪。」

注……到經不解：

六經を経過したら太陽病は治癒し始める。「～至七日以上自愈者以行其經尽故也」「発於陽七日愈」などと「辨太陽病脈証并治上第五」に記述されている。治る時期がきても治らない状態を指している。

注……圜血：

かわや。故に、血便すること。

⑤「太陽傷寒者。加温鍼。必驚也。」

⑥「太陽病中風。以火劫発汗。邪風被火熱。血氣流溢。失其常度。両陽相熏灼。其身発黄。陽盛則欲衄。陰虚則小便難。陰陽俱虚竭。身体則枯燥。但頭汗出。劑頸而還。腹滿微喘。口干咽爛。或不大便。久則譫語。甚者至噦。手足躁擾。捻衣摸床。小便利者。其人可治。」

注……劑頸而還：

劑は薬剤のこと、動詞として用いているから、ここは頸部で作用して後に還るとの意。

⑦「太陽病。二日。反躁。反熨其背。而大汗出。大熱入胃。胃中水竭。躁煩。必發譫語。十余日。振慄自下痢者。此為欲解也。故其汗從腰已下不得汗。欲小便不得。反嘔。欲失溲。足下惡風。大便鞭。小便当数而反不数。反多。大便已。頭卓然而痛。其人足心必熱。穀氣下流故也。」

注……熨：ひのし

注……卓然：ぬきんでる事、此処はきわだっている様を形容している

⑧「火逆下之。因燒鍼煩躁者。桂枝甘草竜骨牡蠣湯主之。」

⑨「傷寒脈浮。医以火迫劫之。亡陽。必驚狂起臥不安者。桂枝去芍薬加蜀漆牡蠣竜骨救逆湯主之。」

⑩「燒鍼令其汗。鍼処被寒。核起而赤者。必發奔豚。氣從少腹上衝心者。灸其核上各一壯。与桂枝加桂湯。」

以上の十条である。概括すれば

1. 陽熱の状態に灸をすれば、それを助長することになるので、症状の悪化を招く。
2. 胃熱の状態、津液不足の状態等に、灸して陽・熱を加えては逆治となるので、よろしくない。
3. 「微数之脈」とは微脈で且つ数脈のことである。つまり、虚熱や燥熱を示している。灸によって熱や燥を助長することを恐れている。

『黄帝明堂灸経』に

「凡点灸時 若値陰霧大起 風雪忽降 猛雨炎暑 雷電虹霓 暫時且停 候待晴朗 即再火灸  
灸時不得 傷飽大飢 飲酒大醉 食生硬物 兼忌思慮愁擾 恚怒呼罵 吁嗟嘆息 一切不祥  
忌之大吉」

注……虹霓：ニジのこと

概括すれば、

天候が甚だしく荒れている最中・暴飲暴食の状態の時・精神的消耗の甚だしい状態や情緒不安定の甚だしい状態にある時には、灸する事を避けなさいと言う事である。これらの何れも「気」が「激動」している状態で、とても手をつけられる状態ではないと、認識されている。

と言うことになる。

### 3. 灸痕について

#### ◆灸痕の問題

上質の艾で柔らかい捻りの半米粒大程度の艾粒の場合には、3～5壮程度では火傷は極めて軽度であり、表皮が僅かに焦げた色が付く程度のものであり、表皮が炭化して黒くなるのは5～6日継続してすえた場合である。しかし皮下組織が破壊される程の火傷の場合には、完璧な治療をしても傷痕を残す事は避けられない。

瀉法の激しい打膿灸以外に灸痕が残るのは、痒みの為に早すぎる痂皮剥離が起こった場合などである。表皮が完全に再生されて、痂皮（カサブタ）が自然に離剥して脱落する場合には、灸痕は残らないものである。点灸によって出来る痂皮を、意識的あるいは無意識的にでも搔き剥がさなければ、灸痕は残らないものである。痂皮は表皮が再生されると自然に剥脱していくものであり、この場合には灸痕が何時までも残ると言うことはない。

#### ◆灸痕が痒い時

「体が灸を呼んでいる」「灸を欲しがっている」などと言う地方があるが、1～3壮くらいをすえると痒いのは治まる。水泡が痂皮の下に生じて痒い場合には、そのまま灸をすると良い。歴然としていれば痂皮を剥がさない様に注意して、水泡に漿液を抜いてから灸をすえるのが良い。

#### ◆灸痕が化膿し易いのは皮毛腠理の分に「水滯」があるからである。浮腫があつて皮膚が如何にも薄い人・湿熱停滯の人は化膿しやすい傾向が見られる。

#### 追記：灸すべきか刺鍼すべきかの判断の問題

この問題について『素問』通評虚実論第28に「絡満経虚、灸陰刺陽。経満絡虚、刺陰灸陽」と示唆されている。今後、検討研究を要する。